

# 中野重治著「萩のもんかきや」考

——地方に残された戦争——

長 田 真 紀

## I

作家も作品も生まれ落ちた時代から決して自由ではいられない。好むと好まざるとに関わらず、その時代のにおいと翳がどこかに息づいているものである。

中野重治の「萩のもんかきや」<sup>(1)</sup>は、昭和三十一年（一九五六）十月號の「群像」に発表された随筆的な趣致をもつ短編小説である。敗戦から十一年が過ぎたこの年の七月、経済企画庁は「年次経済報告」、いわゆる「経済白書」において、「もはや戦後ではない。」というフレーズを含むレポートを発表した。すぐさま人口に膾炙し流行語にもなったこのフレーズは、敗戦による未曾有の壊滅状態からの復興が前年の段階ではほぼ終わり、世界史上稀にみる高度経済成長の幕開けとなったことを象徴するものとなった。

しかしそれはあくまでも経済の上でのひとつのかたちでしかなかった。戦争がもたらした翳が一人ひとりにとって異なる意味を有しているように、敗戦とその後続く戦後も決して一様ではなかった。

本稿では、中野重治が、地方へのまなざしという視線を組み入れながら、「萩のもんかきや」に現出させたひとりの女の戦後のかたちを、作品の梗概を追いながら考えてみたい。

## II

年五十にもなる「私」は、東京から山口県の萩までひとりでやってきていた。具体的内容の詳細は語られていないが、何年ものあいだ反目して拗

れたふたりの人間の仲裁役とでもいうような用件であった。

そのとき私は萩の町をあるいていた。私はぶらぶら歩いていた。私の用事はすんでいた。私はひとぶらつきぶらついて、それから汽車に乗って東京へ帰ればそれでいいのだつた。

ともかくも用件は片付き、「一応の責任からはのがれられた。私はほつとしていた。」気骨が折れる用件も終わった解放感は、旅先であるということとさらに寛いだものとなる。

それもすんだ。無責任が楽しい。旅の人間なことで気が楽だ。私は歩いて行つた。天気もいい。

萩は小さな、そして静かな町であった。一昨日は松下村塾を見た。今、町中を歩いていくと、四辻の一角を大きく占める素封家の屋敷の前まで来た。門札を見ると、ある国会議員の実家であることがわかった。まもなく祭礼があるらしく、太鼓を載せた櫓がこの家の門前に置かれ、その上には対の御神酒徳利に御幣がさしたものも載せられていた。祭礼はその地域のものであり本来ならばそれら祭具も町内全体のものである。しかし、おそらくその素封家が相当の出資をしているとみえ、あたかもその家の祭礼のごとく準備が整えられているのである。

毎年、春秋の、それが例にもなっているのだろう。そこにごまかしがある。しかし一種のなごやかさもある。旅さきの気楽な無責任さが、私をなごやかさの方へ引く。

いつもだったらそんな光景は不快に感じられ憤りすら覚えるはずなのに、今日にかぎっては腹立たしさも感じず、かえって子ども時代の記憶を呼び起こす。

「私」の村には村井という大地主がいて、貴族院の長者議員や帝国農会の大頭株もしていた。村では「村井の檀那さん」であった。毎年村に伊勢の大神楽の一行がやってくる。普通の家へは獅子の頭としっぽの二人組がやってきて、米一握りのかわりに一舞だけする。子どもがいれば、獅子の口で頭を咬むくらいである。ところが村井の屋敷では十数人の一座が揃って獅子舞をはじめ芸当をやる。村の子どもたちは家から箆を持ってきて見物するのである。

そういう毒のないところへ、旅さきの心が行く。人通りがなくて、櫓の上へおとなしく日が照っているのがそれを固定させる。

無邪気な子ども時代の思い出。社会の構造など全く無頓着で、それですんでしまった頃の懐かしい郷愁へと心は馳せるのである。

この町が、遠いところで、小さい町で、平生そこに直接関係がない、こうやつてここへきている現在も関係がない、ということがいつそうそれを固定させる。

奥まで踏み入って深く考えることを、いつのまにか「私」は回避する。そしてそれを自覚しつつ、かつて津和野の町を汽車の車中から眺めた時の心境を思い起こすのであった。

「あ、これが津和野か……」

さびしそうに、山あい打ちすてられたように見えたものの、なかへはいつてみれば、そこにどんなものがどぎつくとぐろを巻いていたか知れたものではない。それを見たくない。それがあつてにしても、そこからさしあたり逃げたい。捨てられたようにして置かれた町、そう見て通るほうが気が楽だ……

「萩のもんかきや」は、主人公「私」の旅によって成立している作品である。旅人としてのまなざしが繰り返し強調されている。旅は日常世界を離れ非日常の時空に身を移す行為にはかならない。したがって、通常では見えないものが明瞭に見えてくる。生活の場所を離れることで、本来の自分を取り戻し新しい自己回復も果たせる。それが旅の魅力でもある。

しかし、たとえどんなに風光明媚な土地であっても、どんなに旅行者にとっては快適な場所であっても、そこに住む人々にとっては、そこが生活の場、日常世界となる。生活者はその土地から恩恵を享けながらも、同時にそこから生じるさまざまな問題を自分のものとして背負っていかなければならない。あるいは、取るに足らないつまらない場所、そこから早く移動した方がいい場所であっても、簡単にはうち捨てて離れることができない土地もある。いずれにしても、生活というものが人間におよぼす強大な力、容易には覆すことはできない厳しい現実がそこには必ず存在する。それは普遍的なものもあるであろうし、それぞれの土地特有のものもあるだろう。とりわけ地方においては、問題が中央よりも早く顕在化し、変えることも変わることも困難であり、また過ぎ去ったとしても余燼がくすぶり続けることも多い。

旅人も漂泊を続けられないかぎりいつかは現実生活の場に帰らなければならない。もしくは長くその地に逗留すれば、そこが自分の生活空間に変容していく。非日常に身を置き続けることは不可能に近く、その非日常が日常へと化していくのである。

その土地に横たわる現実と真っ正面から向き合い、さらにそこに潜んでいる問題を凝視し内奥に深く踏み入って考え行動することの困難さ。見つめないでいたい、考えないでいたい、関わらないでいたい、といった、人間の心理的メカニズムが透視されている。

「私」はさらに萩の町を歩き続ける。

呉服屋、文房具屋、油屋、電気器具屋などがある。大きな郵便局もある。その向いには菓子屋があることに気がついた。「私」はそこへずいっと入った。

「私」は妻と現在中学三年になる娘をもつ生活者である。そもそも買い物に苦手な「私」は、旅に出ても土産など買って帰ったことはなかった。昔は土産を買って来ない父を非難した娘も、今ではそれが当然のことだと思ってしまうらしい。土産どころか日曜日さえも娘のために使ってやらなかった。「父親というものが、子供である娘のためにはすこしも存在しないように」娘には思われたようだ。

その私が菓子屋へずいとはいつたのだから、やはり心に隙があつたのだつたらう。つまり心にゆとりがあつたのだつたらう。

その菓子屋はなかなか上等の店らしかった。そこには夏蜜柑の砂糖漬けが置かれていた。菓子箱には「萩名物」と記されてあった。果物の砂糖漬、とりわけ黄に砂糖の白がからんだ夏蜜柑や三宝柑の砂糖漬が好きな「私」は、目を引かれる。そして、あの戦争——太平洋戦争に突入していく直前の頃の記憶が呼び覚まされる。

昭和十五年から十六年になると東京での生活はかなり苦しくなった。煙草や甘いものがまず姿を消した。家には乳飲み児がいた。卵も手に入らない。買出しに行き、やっと入手した卵が混乱した電車のなかで人に押されてつぶれてしまう。仕方なく途中で降りてプラットホームのベンチであわててすすり込む。妻は夏以来警察へ引っ張られていた。一歳半の子どもを抱え、「私」は困り果てていた。妻は暮れが押しつまった頃、漸く帰ってきた。

昭和十六年の春、見かねた友人が淡路島の洲本へ家族でやってこいと手を差し伸べてくれた。そこには確かに食糧があった。洲本に移ってから一週間もすると子どもは太ってきた。

ある日港の方に行ってみると、いかにも場末といったところに一軒の駄菓子屋があり、そこに夏蜜柑の砂糖漬の屑をかき集めたものが売られていた。それでも砂糖漬には違いなかった。「私」は買って帰り友人にこんなものを見つけたと言って自慢した。

「へえ。そんなもの食うんかね。」

「食うさ。がつがつだよ……」

「へえ。そんなんなら上等のがあるよ。おれんとこじや誰も好かんもんだから……」

そういつて戸棚の奥から引きだしてきたのを見たとき私たちはうつけたように笑いだした。あまりに上等すぎた。おとなの手のひらをいつばいにひろげたくらいの舟底形が砂糖にくるまつている。砂糖のかちかちになつたところを子供が大よろこびで嚙んだ。昭和十六年十二月よりも前のことだつた。

太平洋戦争が実際に開始される前から食糧の欠乏は始まっていた。ことに甘いものは贅沢品であり入手困難であったから、当時のほとんどの日本人にとって甘味への渴望は切実なものであった。

しかし、この十五年前の、たった十五年前の体験はもはや過去の出来事と化し、「私」にとってすら切実さからある種の懐かしい思い出に変貌しているである。

ここに、戦争の風化、記憶の風化のひとつの姿がある。

さて、菓子屋で夏蜜柑の砂糖漬を購入し、郵便で送ることを伝えると、店のかみさんはとても親切にしてくれ丁寧に包装してくれる。「私」は子どもの宛て名を記した包みを持ち今度は向いの郵便局へ入った。郵便局の対応も悪くなさそうである。ところが「私」は手続きをするために包みを台の上に置いたとたん、やはりこれは自分で「持つて帰ろう」という気になった。

私はぶらぶら歩いて行つた。かかえた砂糖漬が、これをたずさえて帰るということで私を甘やかしている。

いつまでにどこへ行かねばならぬということはない。あるにして

も、停車場に汽車の時刻くらいのところだ。汽車賃はある。弁当代もある。そして東京からずつと遠い。小さい町で、面倒な無駄骨折りからはひとまず解放された。おまけに、ついでないことに子供に土産を買った。それを抱えている。平安な、いくらかやくごな心地で私はなお先へ歩いて行つた。

町の様子は、なんとなく裏通りといった感じになってきた。萩の町の端になったのだらうと思っている「私」の目に入ったのは、ちっぽけな店と、そこで俯いて何か一心にしている女の姿だった。

なんにしても高い鼻だ。まだ若い女らしい。しかし顔はわからない。上から見おろした位置になる黒い髪の毛、その下の額のほんの一部、その下の、二つ並んだ眉の線、その下の高い鼻すじ、それだけしか見えない。眼は見えない。頬もほとんど見えない。口も顎も見えない。よほどの鼻の高い人だらう。ちよつと日本人ばなれのした鼻すじだ。造作が見えないから、年恰好は見当がつかない。それでも年取つた人ではない。むしろ若いほうだらう。

その若い女は、右手におそろしく細い穂先の細筆を握り、左手には小壺を握り、ちよつ、ちよつ、と何かをかいている。漸くそれが、羽織が何かへ抱茗荷をかいていることがわかりほっとするが、見ていた「私」の方が疲れてしまう。

私はすぐそこから離れた。見ていられないようなところがそこにあつた。あんなふうによつていけば、あの高い鼻はますます高くなつて行くほかはないだらう、ますますあの立派な鼻すじは細くとながつて行くほかはないだらう……という気になつてそれがひどく残酷な仕打ちに思えてくる。若い女らしいだけに、それがみすみすおろし金でおろされて行くように見える。

「私」の目に映ったのは痛々しさであった。そして、離れる拍子にそこに看板のようなものがあることを発見する。

「もんかきや」

木の小さい板に、仮名でそう書いて打ちつけてある。

ああ、「も、ん、か、き、や」か。もんかきや、もんかきや……

私は、「もんかきや」という言葉をはじめて見た。

女が、神経を擦り減らすようにして、身を削るようにして、根を詰めて続けている作業が、着物に紋を描くという仕事であったことは、「私」にとって思いもよらないことだった。いったい商売としてやっていかれるのだろうか、紋ひとつ描いていくらになるのだろうか、と、生業としての「もんかきや」のおぼつかなさを案じてしまうのである。

歩きだした私にもうひとつ表札のようなものが見えた。「もんかきや」の板の下に、たてに並べて打ちつけてある。

「戦死者の家」。

「もんかきや」より大分ちいさい。

してみると、女は後家さんなのだろう。寡婦なのだろう。この家が「戦死者の家」で、あの女はそこへ職人として雇われているのでは決してあるまい。あの人が、つまりこの「戦死者の家」の主人なのにちがいない。

鼻の高い美人が——それは、あの肩つきからみて、背も高い美人にちがいない。——戦死者の寡婦で「もんかきや」だということが、その「もんかきや」という仕事が、機械も動力も使わない全くの手仕事だということが、また紋つきの紋をかくというその商売が、女の鼻が西洋人のように高いだけにつらいものに見えてくる。「もんかきや」——言い方が古いだけ、その分量だけ逆にあたらしい辛さがそこからひびいてくるようにも思う。いくらかだらけたような、気楽



で無責任な感じだつた私がいきなり別の気持ちになつたわけではない。それでも、「もんかきや、萩のもんかきや……」といった調子で私はいくらか急いで歩いて行つた。

敗戦から十一年。何らかのかたちで戦争の悲惨を噛み締め、その記憶が生々しく刻み込まれていたはずの日本人の多くが、いつのまにか戦争を忘却していった。生活を貪りそこに埋没し日常性に狎れると、意識の鈍磨と弛緩した生が訪れる。一方で、生きるために忘れていかねばならぬものがあることも事実である。現実の内奥を凝視することも、自覚的に内省の深化をはかることも、緊張感を強いることにはかならず、できることなら回避したいと思ってしまうのも偽わらざらぬ人間の心情である。

しかし、「もんかきや」の女は、戦後十一年経っても、夫が戦死したことから解放されることはない。だからこそ、「もんかきや」と書かれた板の下に打ちつけてある「戦死者の家」の表札は取り払われることなくそこに存在し続ける。作品前半に書かれた素封家の門札が目に入った時の「私」の心情と、「もんかきや」や、ことに「戦死者の家」の表札を目のあたりにした瞬間のとまどいとは、述べるまでもなく対比されているところである。

夫を失った悲しみを抱えながら、どうやってこれから生きていくかという現実問題にも常に直面せざるをえない。夫が戦死してからこの日まで嘗めたであろう辛酸は、これからも続くであろう忍耐は、女の高い鼻をますます高くしていくのである。弛緩とは対極にある緊張感を「もんかきや」の女はまるで鎧のように身に纏っている。旅先での気楽さ、無責任さに浸っていた「私」は、かつては自分のなかで切実だったはずのものがいつのまにか風化し、そして忘却されつつあったことに愕然とする。

多くの日本人が、奇跡的な経済発展の予兆を前に浮き足立ち過去を切り捨てていこうとするなかで、中央から遠く離れた萩の町の、さらにまたその端に、まるで取り残されたかのように戦争を背負いながら生きている女がいた。世の中から孤絶するかのように黙々と筆を動かす姿。しかしそこには慎ましくも精神の矜持があった。

太平洋戦争によって六十万人<sup>(3)</sup>の女性が、いわゆる「戦争未亡人」となったという。

※「萩のもんかきや」の本文引用は『中野重治全集』第三巻（一九九六年六月 定本版第一刷発行 筑摩書房）に拠った。

## 注

- (1) 初出の「群像」誌では、「なかの・しげはる」の名で発表されている。なお本作品は、「文藝」（昭和三十二年一月 新年特別號）の「作家推奨名作選」に、室生犀星の「萩のもんかきや」をすいせんす」という推薦文を付し、再掲載されている。ここでも「なかの・しげはる」の名で発表されている。初出から三ヶ月後の時点で、他社の雑誌とはいえこのような扱いは異例のことではないだろうか。なお、一九五七年七月には本作品名を書名とした短編集『萩のもんかきや』が筑摩書房から刊行されている。
- (2) 筆者は、「戦死者の家」という表札は寡聞にしてまだ知らない。しかし「遺族の家」（遺の字の上に菊の御紋がある）、「戦没遺族の家」「名譽の家」（いずれも戦と名の字の上に日の丸がある）のプレートは知っている。
- (3) 『戦後史大事典』（佐々木毅ほか編 一九九一年三月 三省堂）